児の入院に対する母親の心理的反応の推移

○中　村　　孝（静岡県立こども病院）
大久保　俊　夫（　　〃　　）
北　野　市　子（　　〃　　）
金　田　早　苗（　　〃　　）
大　橋　祐　子（　　〃　　）
成　嶋　澄　子（　　〃　　）
内　藤　キ　ヨ（　　〃　　）
保　住　幸　子（　　〃　　）
岡　村　暁　美（　　〃　　）
荒　井　留美子（　　〃　　）
黒　木　久美子（　　〃　　）

研究目的

母子相互作用は生活のすべての面で起っているのであるが，入院という最大の事件の中で母と子がどのように心を対応させてゆくかを調査し，母子相互作用の一端に触れたいと思った。

研究方法

前半はアンケート調査を施行した。同一項目を入院時と退院時に調査し，変化する項目変化しない項目を探した。対象は，感染病棟と幼児外科病棟にした。別に項目を少し変えて新生児・未熟児病棟においても調査を行った。

後半は小嶋謙四郎教授作製の母子関係検査法を用いて，健康児とその母親，入院児とその母親についてテストを行った。

研究結果

1. アンケート方式による入院時，退院時における母親の意識の変化の調査

調査は，a.病気・障害について，b.入院・分離不安について，c.存在感・自信についての3面から行われた。各項目毎に四段階評価で記入してもらい，それに点数を与えて検定を行った。

「この子の状態が心配でしょうがない」は当然退院時には有意の減少がある。「この子が助かるかどうか不安である」は入院時から低い評点であった。

「この子が寂しがっていると思うといてもたってもいられない。」は入院時に高く，退院間際でも尚高かった。「病棟に慣れるかどうか心配である。」も同じ傾向を示し，分離不安は小児側より母親側に強いと考えられた。「早く退院させたい。」も入院時より高くみられる。

「この子にとって私は大切な存在である。」は入院時，退院時共に満点に近い評点を与えられ「育児に自信あり。」も入院退院時共に高い。「育児に自信がない。」が退院時に減少する。

未熟児についての調査では，「発達や知恵のおくれが心配である。」が入退院時ともに高く，「気おくれを感じる。」「さわるのが恐い。」は退院時に減少し，「この子は私を見ていると思う。」が退院時には増加する。

未熟児では，はじめはこわい存在であったものが，次第に母親感情をとりもどしてゆく様子が分かる。

2. 健康児，入院児及び母親の母子関係検査について

6図の小児ポーズに対して，母親カードを選び，それを適当と思われる所におき，短いストーリーを作ってもらうという形で検査が行われる。

a. 健康児とその母親との比較

1) 母親カードの選択

どのような母のポーズのカードが選ばれたか，母と児はほぼ同一傾向であり，手をさしのべている（M2），駈よろうとする（M5）が最も多く，腰に手をあてている（M3），腕をくんでいる（M4）

がそれについでいる。

然し，こども図版毎にみると微妙な相違があり，例えば，こどもが倒れている姿態では，小児側はかけよるカードを求め（M5），母側にそれも多いが，両手を腰にあててみている（M3）も多くなっている。一般的に，こどもは，母親の動きを希望し，母親側は観察が多くなる。

2）母子間の距離

図版上におかれたMカードの位置は，すべての図版においては近くにおく。また，母子とも動きのあるこどもポーズには離れて，静止のポーズには近くにMカードをおく傾向がある。

b. 入院児と健康児及びその母親のテスト

1）Mカードの選択

母親のテストでは入院児の母親にM3が多く，M4が少なかった。小児のテストでは有意差がなかった。

2）平均距離

入院児の母親は健康児の母親よりMカードを近くおく傾向があり，特にこどもが倒れているC－1図版では有意に近かった。

3）ストーリーについて

原法に従い，母子間の知覚，母親行動，こどもの母親に対する態度，母子相互パターンの4方面から検討した。

入院の小児はC→M，こどもから先に行動を起す物語を有意に多く作り，母親がこどもを賞めたり，慰めさり，勇気づけたりしている場面が多く，こどもの態度に愛着が多いストーリーであり，身体的相互作用は少なく，言語的相互作用が多く話されていた。

以上のことから，入院では母親はこどもの近くに立ちたがり，ある種のポーズでは異常に反応することはあっても，一般の母親とあまり大きな相違はないが，小児側で愛着が増加し，身体的行動を求め，慰さめ勇気づけをうけたいなど求めるサインが多く出されていると考えられた。

考　　案

入院は多くの不安を伴う突発的な事件であるが，その中には，病気，症状そのものに対する苦痛，不安，あるいは死へのおびえがあり，分離不安があり，経済的，身体的な苦痛もあって，非常に複雑である。

前半のアンケート調査では，それらの不安が入院時に高く，退院時に低くなってゆく傾向は数字的にとらえることが出来たが，常識的な数値であって，母親の胸の内，微妙な心の変化を探るまでには到らなかった。

後半の姿態を用いても作画，作話ではある程度母親及び小児の心の状態を促えることが出来たように思う。然し，このような母親，小児の心の状態は集団で検討すべきものではなく，1例1例分析してゆくべきものなのであろう。今後は更にきめ細かい分析の集積が大切であると思われた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

母子相互作用は生活のすべての面で起っているのであるが,入院という最大の事件の中で母と子がどのように心を対応させてゆくかを調査し,母子相互作用の一端に触れたいと思った。